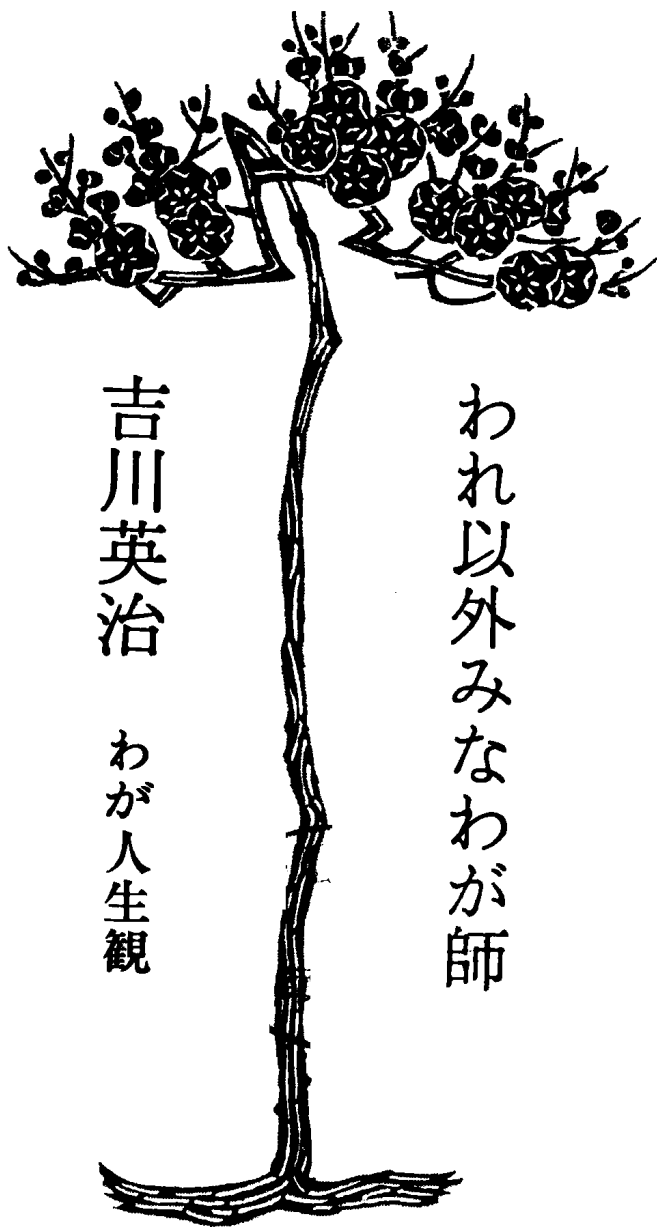






われ以外みなわが師

吉川英治

わが人生観

われ以外みなわが師 一わが人生観29—

1972年2月5日 初版発行

著 者 吉 川 英 治

発行者 大 和 岩 雄

発行所 ^{だい} ^わ 大 和 書 房

東京都文京区関口1の33

振替東京 64227

電 話 (203) 4511~4

郵便番号 112

製版・印刷・信毎書籍印刷 製本・東京美術紙工

1395-040290-4406 <検印略> © Humiko Yoshikawa 1972



0	0	0
3	3	3
9	9	9
11		

英治稿箋

言 幸 武 死

国	1013
明	1013
の	
ま	
に	

鱼歌水心 (九)

[illegible]

④
叢
糸
ど
の
か
⑤

912
 方の
 床の
 隅の
 隅で、
 立ち
 上り
 した
 海
 角、
 さん

つ
と
清
AL
た
。

花	市	角	兵	利	も	ち	、	そ	の	周	り	の	者	、	博
な	款	を	そ	ろ	へ	て	、	付	が	上	つ	左	。――	が	、
側	の	、	長	家	化	後	や	伊	織	た	ち	の	乃	、	森
か	た	ま	り	が	、	自	然	と	し	て	乃	の	を	兄	と
こ	平	新	を	数	ひ	な	が	う	、	角	兵	利	も	、	周
、	じ	っ	と	、	動	か	な	い	事	に	努	め	て	乃	た
色	と	、	減	ひ	や	う	も	な	い	日	、	森	源	の	田
信	じ	て	乃	た	人	々	の	う	へ	を	包	ん	だ	。	

我 皆 我
师 以 外

昭和三十一年秋文化の日 桑名



I わが青春の時―忘れ残りの記・抄

わが家 12

ぼくの生れた頃 17

華かなりし父 23

性に目覚める頃 28

没落の日 35

父帰る 47

わが盗児像 52

苦学時代 63

父母の死 76

追想 79

人生の転機 85

Ⅱ 希望の文学―作家の足どり

親鸞の水脈―作家生活の始まり 92

「鳴門秘帖」のころ―躍大作家となる 95

吉川文学のカギ 98

宮本武蔵 106

僕の歴史小説観 113

なぜ「新・平家物語」を書いたか―僕の歴史小説観(2)

骨肉相食む悲しみ―僕の歴史小説観(3) 135

新春太平綺語―私本太平記の背景 145

権力の魔力―「私本太平記」より 150

Ⅲ やさしい・むずかしい―心がまえについて

強すぎる 152

真の勇氣 154

極意の歌 158

石の庭と語る 160

苦徹成珠―有信館茶話 162

青年馬上に棲む 166

四十雀舌 168

やさしい・むずかしい 173

背中哲学 178

Ⅳ 求道の精神——「随筆宮本武蔵」より

「道」の人・武蔵 184

惨心の人か、幸福の人か 185

彼の短所と「独行道」のことば 186

反省の彼と「独行道」のことば 188

五輪書と靈巖洞 190

Ⅴ 女性について

女 196

恍惚 207

古女房 210

Ⅵ 人生余墨——現代を見る眼

デザイン過剰 216

蛙と河鹿 218

梅ちらほら 221

紅梅の客 224

Ⅶ 信じるということ——宗教について

高野往来 236

蓮如をおもう

親鸞さんとは 247

238

解説 吉川英治その人と作品

松本 昭

261

装幀 川田 幹

われ以外みなわが師―わが人生観―吉川英治

I
わが青春の時——忘れ残りの記・抄

わが家

祖父の銀左衛門という人をぼくは憶えていない。ぼくが赤ン坊のころ亡くなったということだ。母のはなしには、まっ白なあご鬚をたくわえ、嫁にはやさしいもの、静かな老人で、小柄ではあるが若いときは美男だったろうと思われるような人柄だったそうである。

しかしこの祖父についての幾つかの挿話を、ぼくは父の口から聞いていて、いまでも忘れていない。じつは、よほどきびしい恐い人だったようである。五石十人扶持とはいえ典型的な封建戸主の一武士であつたらしい。

ぼくは吉川だが、ぼくが育つた横浜では、吉川と呼ぶ人の方が多かつた。だから子供の頃は、吉川だと思つてゐた。どっちが本当かを父にただしたらやはり吉川が昔からの姓だといつた。ついでに、先祖ばなしをぼくに聞かせた。

吉川は橘香という地方名が起りで、何でも富士の裾野にそんな所があつたという。戦国の吉川元春もその他の吉川もここから分れたものであり、自分の家も、関ヶ原役の前、敵方から大久保藩を頼つて身を寄せた沢山な浪人の一人だつた。だから小田原でもそれらの人間は、外者といわれて下士待遇以上には出られなかつた。そして、大久保家へ身をよせた当初の人は法体であつたが、中頃には医者も出、やがて平侍になつて銀左衛門の代まで来たのだといふことだつた。

いずれにせよ輕輩中の輕輩だったろうが、父はぼくにはそうと云わなかった。だから父の父、銀左衛門の逸話にしても、父の都合のわるい事はぼくに聞かしてはいないのかもしれない。従つてどの程度信じていいかも分らないが、父の言を疑う事もなかった白紙の幼時に聞かされたことのみである。然しそれが後々のぼくに影響が無かつたとは云いきれない。もし、あつたとすればぼくには重大だったわけである。現代の中では理解しがたいようなものだが、ぼくを語るためにぼくの一髪をまず手にとって見るというつもりで思い出してみる。

父の兄に、秋山という人がいた。どういうわけか、養子に出た人らしい。維新のさい、藩主の若殿について京都守護の一兵卒となつて中央へ行つた。やがて解任後、小田原へ歸つて来たが、見事な花柳病にかかつていた。小田原藩士ばかりでなく、京都へ勤務に上つた藩では、どこにもそんな若侍がたくさんあつて、上方唱の唱える侍という、眉をひそめられたものだそうだ。

父の兄秋山氏も御多分にもれない名譽の若侍だったわけである。その花柳病もよほど惡質だったとみえ、よく落語にあるような、鼻の障子がつゝ外れて、足腰も立てない重さであつたらしい。そのくせ樂天家でまた小粋な人で、髪はいつも艶々と撫で、帶や着物に凝つた物を着て、よく南縁に坐つては、徒然になると、柄の短い座敷簀を膝に抱えた。そして口三味線で上方唄をくちずさんでいたりした。また唯一の医業には、軒ばに干してある馬の男根を小刀で削つては、それを煎じて飲んでいたという。そういう物が効くという迷信が行われていたのであろうか。

ところが、この秋山氏が機嫌よく病苦を忘れて上方唄など口ずさんでいる、とそこへしばしば、銀左衛門がやつて来て、「この面よごし」と罵つたり、時によると、「貴様のような恥さらしはない、恥を知れ、自分で身の処置ができないなら、親のわしが成敗してやる」と、ほんとに刀を抜いたことがあつたそうだ。

足腰も立てない秋山氏は、そんな時、銀左衛門のまなじりに向って、ただ両手を合せて拝んでいたという事である。いずれは、家族給がかりで銀左衛門をなだめた事にちがいあるまい。そして又、何か世間で耳づらいことでも聞くと、居ても立ってもいられなくなり「斬ってしまう」と秋山家の南縁に突っ立っては、秋山氏から拜まれて、拜まれ負けて帰った事にちがいない。

明治に入って、廃藩になると、この秋山氏も士分だけの一時金を政府から貰った。その金で當時の小田原の遊所に通っては「一歩だからいい。一歩だから」と、ほかの事には一銭も費わず、ちびちびとみんな運んでしまったそうである。

子供心に、ぼくはこの伯父のうらぶれた晩年のまろい背中を憶えている。弟にあたるぼくの父の所へ、度々、無心に来ていたものである。余りにしばしばなので、父と烈しい云い合いをして帰って行く日の淋しい姿や、父の留守にやって来て、ねっちりと長居しているこの人に、母が何かと氣をつかって密やかな苦勞をしぬいていた日のことなど、おぼろに思い出されもする。「秋山の家内です」という小母さんも時々見た。髪へ横櫛でも挿しそうな小さい、きれいな人だった。父のこの兄は、父より早く亡くなった。

銀左衛門についてのも一つの話は、父がまだ年少の頃にもある。

父は、直広というが、少年時代は、丈之助とよばれていた。ある冬、風邪が流行った。母も下男も寝こんでしまい、小さい姉が夕方の台所をやっていた。

まだ十歳そこそこの丈之助は、戸外で遊びに夢中になっている。姉が呼びぬくので、ふくれながら勝手口に立つと「丈さん、良い子だから、町へ行ってお豆腐を買って来てくれない」と云う。「いやだい」と一言のもとにかぶりを振った。「そんなこと云わないで」と、姉は泣かない。ばか